

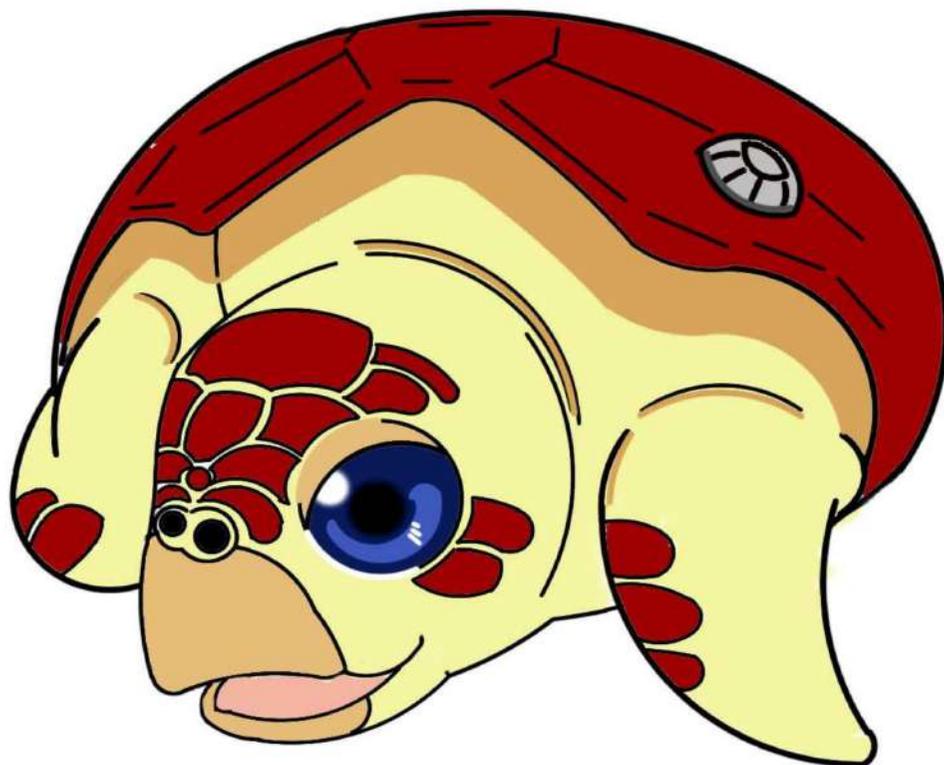


マリンタートル

Marine Turtler

特定非営利活動法人日本ウミガメ協議会機関誌

第14号





表紙の絵 大内裕貴さん

今号の表紙のイラストを描いてくれた大内さんは、鹿児島県の吹上浜を調査したくて、はるばる茨城県より鹿児島大学に入った、ウミガメ大好きな学生さんです。

表紙の絵を募集しています。

皆様から表紙の絵を大募集しています。可愛いイラスト、リアルなウミガメ、ウミガメをモチーフにしたデザイン等々、ウミガメに関するものでしたらどんなものでも構いません。ウミガメを見る機会のある方や、日頃から深くウミガメに関わりのある方は、ぜひ一度描いてみてください。皆様からの素敵な絵をお待ちしております。

- サイズ：B5
- 色：自由。(仕上がりはモノクロになります。)
- 期限：×切はありませんが、次号の掲載をご希望の方は、お早めをお願いします。
- 応募方法：大阪事務局に郵送又はメールでお送り下さい。
- 送付先：〒573-0163 大阪府枚方市長尾元町5-17-18-302
日本ウミガメ協議会 マリントートル編集部
※メールの場合は info@umigame.org まで
件名に「マリントートル表紙」と明記の上お送り下さい。

会報の名称マリン・タートル(Marine Turtle)は、英和辞書には載っていません。つまり、教育的にはあまり相応しい英語とは言えません。ただし、米国では、最近ウミガメ関係者をこう呼ぶことがあります。ウミガメを守りたい人や、ウミガメを研究したい人、立場上仕事でウミガメに関わるようになった人、ウミガメが好きな人など、ウミガメに関わる全ての人を、我々はマリン・タートルと呼ぶことを提唱したいと思います。

○
○
○
**Marine
Turtler**

Contents

| | |
|--|-----|
| ウミガメ基礎講座 13 | 3P |
| 「頂」か「項」か?それが問題だ。 松沢慶将 | |
| マリンタートラー列伝 | 4P |
| 「岩崎富一さんを偲んで」 秦 良江 水間 祥郎 亀崎 直樹 | |
| ウミガメの民俗 8 | 5P |
| 種子島のアカウミガメ漁 藤井弘章 | |
| 連続テレビ小説「ウエルかめ」が始まります | 7P |
| 神戸空港のアカウミガメについて | 8P |
| 悠ちゃんプロジェクト | 9P |
| 悠ちゃん義肢基金にご協力お願いします！ Marine Turtle Divers Projectのお知らせ | 11P |
| ウミガメの海中写真をお送りください | |
| 第20回日本ウミガメ会議のご案内 | 12P |
| Seaturtle goods shop | 13P |
| インターンシップについてのご案内 ご寄付を頂いた方々 | 14P |
| 事務局の主な動き STSmembers募集中! 携帯電話用ウミガメステッカー配布のお願い 編集後記 | |

「頂」か「項」か？それが問題だ。

松沢慶将

長く正しいと信じ込んでいたことが実は間違いではないかと発覚し、そこに疑問を差し挟む余地が無いと観念した瞬間に感じるきまりの悪さといったら、どう表現すればいいだろうか？何も感じない図太い人もいるようだが、塵芥の如く役に立たない無駄な知識を溜め込み、それを時折ひけらかすことに生きがを感じている私のようなタイプの人間の場合、受ける衝撃は半端ではない。先日、ある人気俳優の名前を間違えて覚えていたことが判明し気恥ずかしい思いをしたが、俗世間のことと思えば精神的なダメージはそう大きくはなかった。しかし、ことが自分の専門であるとタダではすまない。

カメの背甲の鱗板には一つ一つ名前が付けられている。その中に、唯一、番号や左右を組み合わせたことなく指し示すことのできるものがある。ご存知だろうか？背甲正中線上の最も頭側に位置し、英語で「nuchal」と呼ばれる鱗板がそれである。実は、この「nuchal」を示す用語として、国内ではこれまで2通りの標記が混在していた。「頂甲板(ちょうこうばん)」と「項甲板(こうこうばん)」である。皆さんは、どちらを使われていたでしょうか？

私の場合、「頂甲板(ちょうこうばん)」派であった。理由はこうである。まず、ウミガメについてはじめて読んだ文献に、「頂-」とあった。日本におけるウミガメ研究の草分けである、内田至氏の「ウミガメ学入門(Ⅰ)」(1983年『海洋と生物』5:1-7)である。また、暫くして、名著「ウミガメは減っているか～その保護と未来～」が出版され、形態学者である亀崎直樹氏による外部形態の図解にも、やはり「頂甲板」とあった。これらに倣ってか、みなべ町千里浜で一緒に調査してきた後藤清氏や初代現場監督の佐藤克文氏らも「頂甲板(ちょうこうばん)」派であったことも、大きな要素であった。時折「項甲板」との標記も見かけても、「頭を上にしての背甲の頂上部だから、正しくは『頂』で、『項』はその誤植に違いない・・・」と勝手な解釈をしてきた。新刊の図鑑で「項甲板」との記述を目にしても、誤植がそのまま流布したにすぎないと、流してきた。

そもそも、「項」というのは、「多項式」やら「二項定理」などで使うように、数式の要素を示す語であり、つながりが薄い。

しかしである。先日、ふっと、このことが気になり、「nuchal」を英和辞書でひいてみた。すると、「後頸部、えりもと、うなじ・・・」に続いて、「(項)」とあるではないか！一瞬、目を疑ったが、確かに「(項)」とある。慌てて漢和辞典を取り出し「項」を引く。そこには、こうあった。「項 1. こう 2. うなじ」。もう、疑う余地はない。nuchalがある位置は、確かに、うなじである。「項」という字に「うなじ」の意味と訓読みがあることを知らなかった私が愚かであった。おそらく、内田(1983)が誤植だったのであろう。後で本人に確認したところ、亀崎氏も実は迷いつつも、これに倣ったとのことであった。

モヤモヤとしていたものが晴れたことに対する爽快感と、自らの知識と勉学の至らなさに対する敗北感に続き、嘘を吹聴していたことに対して、強烈な自責の念がこみ上げてきた。私は、一緒に研究してきた後輩や指導してきた学生も含め、これまで幾多の人々に「頂甲板(ちょうこうばん)」と教え伝えてきたのである。「頂甲板と左右の第一肋甲板が接するのがアカウミガメ、接しないのがアオウミガメ」、「甲長の測定では、ノギスの一方を、しっかり頂甲板の中央に固定して！」と何度口にしてきたことか。「頂甲板(こうこうばん)」派の人に対しても、「それ、頂甲板の誤植ですよ。」と、いらぬお節介を言ってきた。まったく、とんでもないスーパースプレッダーである。この場で、ハッキリと訂正して、お詫びしたい。

皆さん、御免なさい。全て私の間違いでした。正しくは、「項甲板」です。

「岩崎富一さんを偲んで」



MKB岡垣放送に出演中の
故岩崎富一さん

3月末日、突然の訃報に私と置鮎さんは言葉を失った。出会いは会の発足の年1998年にさかのぼる。飄々としてぶっさらぼう、相手が誰でも自分の態度スタイルは変えない人だった。14年前から岡垣のウミガメ監視員として殆ど一人で6キロの海岸を歩いてきた。恋の浦ウミガメの会発会当時は、岡垣で上陸がなかったため、津屋崎の海に彼を引っ張ることができた。何もわからない私たちが助けを求めるとすぐに来てくれた。ブルーのつなぎのポケットに手をつこんだまま慌てず騒がず現れる(でも、きっと車はぶっ飛ばしてくるのはまちがいないのだが)。産卵巣のありか、次の上陸や孵化の時期など、ウミガメに関する予想はズバリ的中するのだ。岩崎さんのウミガメに関する知識の殆どが、ご自分の経験からくる予測であったことは間違いなかった。あー、この人はカメの親戚なんだと最初のころは思っていた。

マスコミへの対応は淡々としていた。テレビの取材がきても自分をとり繕わなかった。この冬に取材を受けたときも、資料や写真はないかときかれ、探し出した箱の中には何もなく、「あー何もない。いいのはみんな人がもっていつてる。」そんな岩崎さんの態度に、カメラの前でひやひやしたことを覚えている。岡垣ケーブルテレビの水間さんは、岩崎さんの協力のもと、砂浜やウミガメを撮影して駅や公共施設で流し、保護の必要性を訴えてきた。しかし、考えてみると、それは行政がやりたかったことで、岩崎さんはひたすらカメに会いたかっただけなのだ。その情熱は、アカウミガメの大産卵地である屋久島の大牟田一美さんに「カメの卵を空輸してくれませんか？」とまで言わせた。もちろん、それは実現していないが、彼のウミガメに対する思いの一端であろう。私が彼の修理工場で見せてもらったのは、海を歩いて拾った陶器片と古銭の類だった。彼の海歩きは唯一の楽しみだったのだろう。暗い海で何を考えていたのだろう。人一倍ウミガメへの熱い思いを持ち、浜を歩くことを少しも厭わなかった。それでいてカメの専門家ぶらず、おごらず、さりげなく……。私たちは本物のカメ屋というべき友を失ってしまった。浜を愛する気持ちや、本当の保護とは何かをおしえてもらった。前述したテレビ番組が放映されて、1ヵ月後に彼は旅立ってしまった。彼は今

ごろキャバレー竜宮城で楽しんでいるだろう。

岩崎さん、先日カメが上陸して卵産んだらしいよ。水間さんや浜田さんが連絡してくれました。移植もしたらしい。安心してね。

秦 良江

平成4年に岡垣町うみがめ調査員として町役場から委託されました。調査をはじめて2年目の平成6年に、3度アカウミガメの産卵が確認されました。3回目に産卵された卵の孵化と子ガメの旅立ちを体験し、彼は感動するのです。以後、うみがめの世界にのめりこんでいかれました。自称「うみがめの母親」と口癖のように言っていることから、いつのまにか「かめ仙人」のニックネームがつくほどでした。平成8年は、2回の産卵が確認され、岡垣町では2年に1回産卵する、というジンクスができました。しかし、その後、平成11年の産卵を最後に6年間上陸がなく、その落胆振りはおそろしくなりました。でも平成17年、6年ぶりの産卵確認。その時の喜びようが目にはやきついています。岡垣で産卵のないときでも、津屋崎や宮崎にでかけることを楽しみにし、子ガメとの出会いに胸をふくらませていたころの姿が偲ばれます。

水間 祥郎

一度だけ、岩崎さんとゆっくり話したことがあった。佐賀の伊万里で開かれた西九州ウミガメ会議の宿の温泉の中だった。この会議も多分、置鮎さん達に、無理矢理引っ張られてきたに違いない。風呂に入ると彼がいた。私の風呂は長いほうだが、彼も長風呂のようだった。1時間ほど、洗い場でゴロゴロしながら、あれこれ話をきいた。確かに難しい人であった。素直ではない。彼は、ウミガメについて、こだわりのある話しを避けていた。日本で生まれたアカウミガメの子ガメが、どこで育とうといいじゃないか、という。自分の目の前にカメがいてくれればいい、岡垣の浜にカメが上がって、産卵するだけでいいという。現代では通用しないことは確かである。でも、彼の残した記録は福岡県の岡垣町の自然史記録の1ページとして、末永く輝き続けることには間違いはない。

亀崎 直樹

種子島のアカウミガメ漁

藤井弘章

2007年11月、鹿児島県の種子島で日本ウミガメ会議が開催されました。これを機会に、日本ウミガメ協議会会長の亀崎直樹氏も、種子島のウミガメ漁について聞き取りを行っています。南種子町の大崎積さんが語ってくれた内容は、『うみがめニュースレター』76（2008年）に掲載されているとおりです。筆者も亀崎会長の直後に2度ほど大崎さんにお会いし、ウミガメ捕りなどについてお話をうかがいました。『うみがめニュースレター』の内容と重複しますが、今回は、大崎さんや周辺地域の方々からの聞き取り内容をとりまとめ、さらに、これまでの種子島のウミガメ漁研究を調べたうえで、種子島各地で行われていたアカウミガメ漁の様子を紹介したいと思います。種子島のウミガメ漁については、元鹿児島大学の民俗学者・下野敏見氏や種子島出身の民俗学者・川崎晃稔氏が再三取り上げています（下野『種子島の民俗』Ⅰ、川崎「海亀の民俗」『海と列島文化 五 隼人世界の島々』など）。

大崎積さんは、南種子町葦永の大崎という地区に住んでいました。ロケット発射場となり、1971年に集団移転した地区です。大崎では3月、4月ごろにアカウミガメを捕り、この肉を振舞って浦祭りという祭りを行っていました。手漕ぎの船で出かけ、アカウミガメを銚で突き捕っていました。3人が櫓を漕ぎ、1人が銚でウミガメを狙いました。アカウミガメの肉がないと浦祭りはできなかったといえます。それほどアカウミガメを捕ること、その肉を振舞うことが重要視されていたのです。大崎ではアオウミガメを捕ることもあったといいますが、祝い事に使うのはアカウミガメであったといえます。

浦祭りは、大崎地区の豊漁を祈る祭りです

が、周辺地域の人々を招待し、盛大に祭りを行っていました。人々は浜辺に座り、シャニンの葉をお膳にして、ウミガメ肉を食べました。周辺地域の人々は、祭りののち、シャニンの葉で肉を包んで土産に持って帰りました。



写真1. 大崎の浜（集落跡は写真左側）



写真2. シャニンの葉

筆者は日本列島各地でウミガメの民俗を聞いて回っていますが、ウミガメの肉を振舞う祭りというのは、ほかではほとんど聞くことはできません。『マリンタートラ』6（2005年）で紹介したように、沖縄本島北部で、ウミガメの捕獲模倣儀礼が行われていますが、ここではウミガメの肉を振舞ったという記憶は残っていません。おそらく、かなり早くに儀礼のみとなったのでしょう。

このように、日本列島におけるウミガメ肉を用いる儀礼として、種子島南部の浦祭りはとても重要な意味を持っています。なお、この祭りは、大崎の隣にある竹崎（荃永のうち）でも行われていました。ここでもアカウミガメを捕って、その肉を振舞ったといいますが、大崎や竹崎では、秋にも浦祭りを行っていました。ただし、こちらは神事のみで、ウミガメを捕ることもなく、また、周辺の人々を招待することはありませんでした。

つまり、種子島南部では、春にアカウミガメを捕って食べることに意味があったのです。アカウミガメは種子島各地の砂浜で産卵します。したがって、産卵のために沿岸に近寄ってくる3、4月ごろにこれを待ち受けて突き捕ることは可能でした。大崎や竹崎では、ヘコハチの花が咲くころが、アカウミガメの捕れる時期であるという自然暦も伝わっています。こうした伝承は、種子島の人々がアカウミガメのやってくる時期をよく知っていたことを示しています。

しかし、ウミガメの生態的な理由だけでなく、地域側にもその理由がありました。この時期は、田植え前に当たっていました。そこで、アカウミガメを食べて、力をつけてから田植えをしようという気持ちがあったといえます。大崎や竹崎を含む荃永という地区は、種子島でも水田が広がる地域として知られています。この地区にある宝満神社では、現在でも赤米を栽培し、その神事が行われています。一見すると、豊漁を祈る浦祭りやそこで食べるウミガメと、陸上の稲作とは相反するように思われるかもしれませんが、ところが、民俗学者の折口信夫によると、稲作の神は海から来る神（マレビト）と捉えられるといえます。この説を用いると、種子島南部で、田植え前にアカウミガメを突き捕って食べることは、海の彼方からやってくるマレビトとしてのウミガメを神に供え、神と共食することで、稲作を開始するという意味合いが見えてきます。

このように、種子島南部の東海岸ではアカウミガメがとても重要だったということが見えてきたわけですが、このほかの地域でもアカウミガメを捕ることがありました。中部や北部の東海岸でもアカウミガメを捕ることがあったといえます。北部の田之脇では、やはり春にアカウミガメを突き捕って食べていました。この地域では、田植え後に疲労回復として、アカウミガメを食べていたといえます。

また、北部西海岸一帯（西之表市洲之崎、池田、壱泊など）では、馬毛島周辺でのトビウオ漁が盛んでした。昭和30年代後半（1965年ごろまで）は、5月から7月にかけて馬毛島に集団移住して、トビウオ漁を行っていました。この時期、馬毛島にはアカウミガメが上陸・産卵します。これを捕獲して食べることもありました。さらに、大隈半島の佐多からアカウミガメをもらったり、買って食べることもありました。これは、馬毛島でのトビウオ漁に、佐多周辺の人々が雇われてきていたことと関係しているようです。以上のように、種子島では、南部から北部にかけての東海岸と北部西海岸でアカウミガメを捕獲していました。東海岸では春にアカウミガメを突き捕り、北部西海岸では、トビウオ漁の時期に捕獲するか、佐多から取り寄せたカメを食べていました。このなかでも、とくに南部東海岸の大崎、竹崎では、アカウミガメと田植えが結びついてとくに重視されていたのです。

今回はアオウミガメについては触れませんが、種子島ではアオウミガメを捕獲することもありました。今回はこのお話を紹介することにします。

なお、今回の話は『民俗文化』21（近畿大学民俗学研究所、2009年）に「種子島のウミガメ漁」としてまとめています。

当会も
監修しています!

平成21年9月28日(月)から、平成22年3月27日(土)まで全150回

連続テレビ小説「ウエルかめ」が始まります

今回のヒロインの故郷は、ウミガメでも有名な徳島県の日和佐(現・美波町)です。物語を進める上での重要なキーワードとして「ウミガメ」が登場する予定です。日本ウミガメ協議会もこのドラマの監修として協力しています。是非ご覧ください!!

【ストーリー】

ヒロイン・波美が生まれ育ったのはお遍路さんもサーファーも泊まる愉快的な民宿(遍路宿)。「お接待精神」にあふれる賑やかな家族に囲まれ育ちました。都会に出て一流女性誌の編集者をめざした彼女でしたが、ひよんなことからウミガメに導かれるように人生を大転換、故郷と向き合うことになるのです。好奇心とねばり腰が裏目に出てドジをふみ、思わぬ方向へ流されながらも、一生懸命「海をこぎいくような」ヒロインの青春を、家族や恋の物語を縦糸に、美波生まれの同級生たちの青春模様を横糸にして描く、明るくコミカルな青春ドラマです。

【タイトル「ウエルかめ」とは…】

波美の父は、手製の木彫りの子亀を、宿を旅立つ人にこう言って手渡します。「いつだってウエルかめ(ウエルカム)」。やがて故郷に生きる決意をした波美は、故郷へようこそ! そんな思いをこの言葉に込め、新たな夢へ歩き始めます。

都会で自己実現するヒロインではなく、生きる場所として故郷を選ぶヒロインを描いた「故郷の朝ドラ」を作りたい…そんな思いからこの企画が立ち上がったそうです。

昔から数かぎりないお遍路さんを迎え、お接待し、送りだしてきた四国。人を迎え入れる場所の温かさや、ウミガメが上陸する浜の温かさが伝わる、明るく希望に満ちたドラマなるようです。大海原を旅し、回遊して、生まれ故郷の浜をめざすウミガメの子のように、出会いや失敗を重ねながら成長してゆくヒロインを、毎朝応援してあげてください!

NHKホームページより

■ ■ ■ 主なキャスト ■ ■ ■

ヒロイン・浜本波美…倉科カナ
ヒロインの父・浜本哲也…石黒賢
ヒロインの母・浜本加代…羽田美智子
ヒロインの弟・浜本航…大原光太郎
ヒロインの祖父・浜本泰三…芦屋小雁
「ゾメキトキメキ出版」の社長兼編集長・吉野鷺知…室井滋
ヒロインの友人・山田勝乃新…大東俊介
ヒロインの友人・中川果歩…岩佐真悠子
「マニフイーク」の編集長・近藤摂子…星野知子
ウミガメ館の館長・伊崎光男…温水洋一

神戸空港のアカウミガメについて

2008年 自然復帰報告

2008年も神戸空港西緑地の人工海水池、通称ラグーンに4頭のアカウミガメを保護しました。前号ではこの4頭の愛称を募集し、悠、ナミオ、元気、空と名付けられました。この4個体は花田さん(悠)、永田樹香さん(ナミオ)、五百蔵あきらくん・長谷川千純さん・多井幹博くん(元気)、中谷知里さん(空)に名前を付けていただきました。ラグーンで保護していたウミガメは、大阪湾の水温が下がり、外洋へ出て行く時期に放流することとしており、2008年は12月13日に和歌山県の友ヶ島沖でナミオ、元気、空の3頭を放流しました。しかし、悠は両前ヒレの約半分をサメに襲われて失っていたことから、そのまま自然に戻さず、義肢を装着することとしました。詳しくは悠ちゃんプロジェクトのページをご覧ください。また、2000年に明石市で生まれ、須磨海浜水族園で飼育されていたアカウミガメ3個体を自然に戻す事前訓練のため、ラグーンに10月24日から11月16日までの間放流しました。

2009年 ラグーン使用開始報告

冬の間は水温が下がりすぎるため使用を中止していたラグーンを5月31日より使用開始しました。5月31日は徳島県美波町の日和佐ウミガメ博物館にて療養していた悠に加えて、5月17日に保護されていた照(しょう)をラグーンに放流しました。また、6月12日には淡路島の南あわじ市で雌のアカウミガメが保護され、当日のうちにラグーンへ収容しました。望(のぞみ)と名付けられたこのウミガメは13日から14日にかけての夜中、ラグーンにつづく砂浜に上陸し産卵しました。ラグーンの砂浜は人工的に作られたため、自然の砂浜に比べて固く締まっていたが、無事に穴を掘り、産み落とされた卵も発生が進んでいるのを確認することができました。



7月25日の第2回人工ヒレの装着試験で試作品を装着した悠ちゃん



7月25日に開催された「第1回 ウミガメ・エコツーリズム」で健康診断を受ける望ちゃん



ロガーを装着して放流される照ちゃん

悠ちゃんプロジェクト

2008年6月に発見し、ラグーンで保護していたアカウミガメの「悠」に人工ヒレをつけようというプロジェクト。悠は両前肢が欠損した状態で発見・保護されました。傷口から明らかにサメによる被害だとわかりました。ラグーン内では自力で餌もとれているようでしたし、一時は他のカメと放流しようかと考えていました。しかし、両方の前肢がないと、うまく泳げず、自然界では生きていくのが難しいだろうとも考えられました。また、神戸の市民からも「放さないで」という声が相次ぎました。そこで、かつて美ら海水族館のイルカにつけた人工ヒレを参考にして、このカメにも人工ヒレを付けられないかと考えました。何力所か打診した会社には不景気のために断られてしまいましたが、川村義肢(株)という義肢専門の会社が興味をもってください、「おもしろい。やってみましょか」ということになりました。そこで、必要とする専門家の方々をメンバーに加え、AFプロジェクト(悠ちゃんプロジェクト)を立ち上げたのです。正直、人工ヒレが成功するかどうかはわかりません。でも、困っている人(今回はカメですが)のために、困難に立ち向かうことは人としての義務ですし、楽しいことです。何とか悠ちゃんにヒレをつけてやり、太平洋を泳いでもらいたいと考えています。



プロジェクトのメンバーと役割

| | | |
|------|-----------------------|---------------------|
| 川村 慶 | 川村義肢(株)社長 | 人工ヒレの開発と製作 |
| 松田靖史 | 川村義肢(株)技師 | 人工ヒレの開発と製作 |
| 佐藤克文 | 東京大学海洋研究所准教授 | 行動記録による人工ヒレの評価 |
| 浜 夏樹 | 神戸市立王子動物園獣医(獣医学) | 神戸における健康管理 |
| 植田啓一 | 沖縄美ら海水族館獣医(獣医学) | イルカの人工尾びれ開発で得た知見の提供 |
| 加藤直三 | 大阪大学大学院工学研究科地球総合工学専攻 | ヒレの動きの情報収集と解析 |
| 豊崎浩司 | 日和佐うみがめ博物館館長 | 避寒先での飼育・健康管理 |
| 田中宇輝 | 日和佐うみがめ博物館学芸員 | 避寒先での飼育・健康管理 |
| 伊藤健三 | (株)ニチイ学館 | 福祉分野からのアドバイス |
| 大鹿達弥 | 神戸市観光交流課 | 神戸市における窓口 |
| 優谷真理 | 東京大学大学院生 | 看護技術・手法の開発 |
| 亀崎直樹 | 日本ウミガメ協議会会長・東京大学客員准教授 | 世話役 |

経過報告

2008年

- 6月25日 紀伊水道にて発見
- 6月26日 神戸空港島人工海水池に保護する
- 12月13日 徳島県美波町日和佐うみがめ博物館へ避寒

2009年

- 1月14日 川村義肢に協力要請、人工ヒレプロジェクト開始決定
- 3月2日 第1回検討委員会
- 3月10日 日和佐の悠ちゃん体調崩したため、水温管理のできる特別水槽へ
- 4月4日 悠ちゃんの性判別 雌であることが明らかに
(南知多ビーチランド黒柳賢治氏の内視鏡による検査で)
悠ちゃん前肢基部の型とり
(川村義肢の川村社長、松田技師、神田技師によって型とり)
アカウミガメ遊泳運動の解析用画像撮影
(大阪大学の加藤直三教授によってアカウミガメの遊泳運動が撮影)
- 5月31日 ラグーンに移動 行動解析のためのデータを加速度ロガーによって収集
(東京大学の佐藤克文准教授によって)
- 6月19日 第1回検討委員会
- 6月20日 第1回 人工ヒレの装着試験を実施
- 7月25日 第2回 人工ヒレの装着試験を実施

前ヒレをなくしたウミガメを助けて！

悠ちゃん義肢基金にご協力お願いします！

前ヒレをサメに食いちぎられたアカウミガメの「悠ちゃん」！

このウミガメを元気に海に帰してあげたい！

専門家の方々をメンバーに加え悠ちゃんプロジェクトが始動しました。
人工ヒレを作るのは困難ですが悠ちゃんに元気に太平洋を泳いでもらえるよう、
「悠ちゃん基金」にご協力お願いします！！



振込み口座はコチラ

泉州銀行 枚方北支店
店番号：045 口座番号：0540977
口座名：ウミガメ義肢基金 代表者赤井絵里香
カタカナ：ウミガメギシキキン

ゆうちょ銀行
口座番号：00900-1-170710
ウミガメ義肢基金 カタカナ：ウミガメギシキキン

Marine Turtle Divers Projectのお知らせ

ウミガメの海中写真をお送りください



第1回 えこがめ賞 大場様



第1回 うみまーる賞 白神様

日本の沿岸は太平洋のウミガメにとって重要な餌場であることが様々な情報から明らかになってきました。

ところが、産卵に上陸するウミガメとは違って、海の中で生活するウミガメの生態や分布はわかりません。

そこでダイバーの皆さんの力をお借りして、

日本の沿岸の何処で、どのような種類のウミガメが、どのようにして生活しているかを明らかにしたいのです。

これによって得られた成果に基づいて彼らの保護対策を立てることができるのです。



ウミガメの写真なら何でもOKです!!

たとえウミガメが小さく写っている写真でも周辺の環境を知ることができます。

日付、場所、水深などのデータがあれば送って下さい。

この企画に寄せられた写真の中から、

ウミガメの生物学上貴重な写真、芸術的に優れた写真を選び、「えこがめ賞」と「うみまーる賞」として表彰させていただきます。

●応募はメールまたは郵送でお願いします

NPO法人 日本ウミガメ協議会
「マリンタートル・ダイバーズ・プロジェクト」係 まで

■メール diver@umigame.org

■郵送 〒573-0163 大阪府枚方市長尾元町5-17-18-302



応募者全員に
Save the Umigame
ステッカーをプレゼント

このプロジェクトは三井物産環境基金の助成を受けて行っています

Anouncement of 20th Japanese Sea Turtle Symposium in Miyazaki
第20回日本ウミガメ会議（宮崎会議）のご案内

これまでの20年、
これからの20年

全国の砂浜が減少し続けています。
砂浜が無くなると、そこに暮らす人々だけではなく、
ウミガメ、植物などさまざまな生物が影響を受けます。
まさに生物多様性の消失です。
ここ宮崎県の砂浜はアカウミガメの産卵地として
天然記念物にも指定されていますが、
全国でも最も侵食が進み大きな問題となっています。
変貌する太平洋でも有数のアカウミガメの産卵地を保全するために、
我々が取ることのできる行動を現実的に、本質的に考えます。

開催日程：2009年11月27日（金）～29日（日）
共催：日本ウミガメ協議会・宮崎野生動物研究会
後援（予定）：国土交通省・水産庁・環境省
宮崎県・宮崎市
みやざき観光コンベンション協会
場所：フェニックス・シーガイア・リゾート
※詳細は随時、協議会のHPでお伝えします。



【プログラム予定】

- | | | |
|--------|----|--|
| 27日（金） | 午後 | 分野及び地域別集会 |
| 28日（土） | 午前 | 公開シンポジウム「北太平洋のアカウミガメの保護」 |
| | | パネリスト Kitty Simonds・George Balazs（ハワイ） Hoyt Peckham（アメリカ） メキシコ漁業者代表 岩本俊孝（宮崎） 大牟田一美（屋久島） |
| | 午後 | 研究発表 口頭発表・ポスター発表 総合討論 2009年のウミガメ情報のまとめ 今年の産卵・死体漂着・標識調査のまとめ |
| | 夜 | ウミガメ討論会 with 焼酎 |
| 29日（日） | 午前 | 公開シンポジウム「どげんかせないけん 宮崎の海岸」 |
| | | パネリスト 児玉純一（宮崎） 西隆一郎（鹿児島） 青木伸一（豊橋） 国土交通省 |
| | 午後 | 研究発表 口頭発表 閉会式 |

インターネットでお買い物

うみがめグッズがインターネットショップからご購入いただけます。オリジナルグッズのご購入はもちろん、会費のお支払いやご寄付にもご利用いただけます。お支払いは代引き、各種クレジット、ネットバンキングで当会イーバンク口座等からお選びいただけます。

アクセスはこちらのアドレスへ

<http://seaturtle.shop-pro.jp>



★新商品のウェルかめTシャツ

携帯電話でお買い物

モバイルショップ(携帯電話)からもSeaturtle goods shopにアクセスしていただくことができます。下記のアドレスから、または右のQRコードを読み取ってご来店ください。



アクセスはこちらのアドレスへ

<http://seaturtle.shop-pro.jp>



★人気の悠ちゃんグッズ



インターンシップについてのご案内

卒業生から寄せられた感想をご紹介します。

私が日本ウミガメ協議会でインターンシップをしようと思ったのは、調査や研究に興味があり、水族館との関連があったからです。最初はウミガメに関する興味も知識もとても低いものでした。協議会では私が想像していた以上に様々な仕事があり、人数も少ないため、1人当たりの仕事量もかなりのものでした。その協議会で、私がおこなった仕事は主に調査の手伝いや事務作業です。その仕事の中でも、特に調査の手伝いとして、高知県の漁師町に行ったことはとても良い経験となりました。漁師さんの船に同乗して、漁の手伝いなどをしながら、混獲されたウミガメを計測し、標識を付けて放流していました。野生のウミガメを扱ったことや漁師さんと交流できたことはすごく楽しく、毎日が充実していました。他にも兵庫県明石市の海岸でアカウミガメが産卵した時のふ化・脱出のインターネット中継や、神戸空港にある人工ラグーンにて保護していたウミガメの監視など、今後の人生では二度と経験出来ないような事をたくさん経験する事が出来ました。このようにたくさんのかたちを経験しましたが、協議会で過ごした時間のほとんどは事務仕事でした。そのような作業をしていたため、全くといって使えなかったパソコンもある程度は使えるようになりました。私は、今年の1月でインターンシップを卒業し、新たな職場に就職しましたが、協議会で学んだ事は今の職場でも、また今後、社会人として生きていく上でも大変勉強になりました。協議会で学んだ事を忘れずに、これからも頑張っていきます。約1年の間、お世話になった皆様、本当にありがとうございました。

松本 美奈

私にとってウミガメ協議会でのインターンシップは、1日1日が刺激的で、たいへん貴重な日々となりました。特に室戸基地(高知県室戸基地)での地元の漁師の方たちと交じって過ごした日々は忘れられないものとなりました。一時期、漁師の仕事に憧れたこともあり、実際に漁の船に乗せてもらい、間近で仕事を見たり、また、獲った魚の仕分けを手伝ったり出来るととても嬉しかったです。あと、年配の人と話をすることも少ないので、人生経験豊富な人たちと話をすることも楽しく、学ぶことも多かったです。毎日嬉しさで楽しさの気持ちでいっぱいでした。そして、ウミガメ協議会にいて感じたことは、会員の皆さんや各地で、産卵・孵化調査などをしてくださる皆さんの力があって協議会は、成り立っているんだなと感じました。これまで生きてきた中でも、そしておそらくこれからの人生においても滅多に経験することのできないことをたくさんさせて頂きました。また、これからの人生に必要なことも多くを学ばせて頂きました。協議会での日々は大変貴重な経験となり、本当にウミガメ協議会でインターンシップをして良かったなと思います。ありがとうございました。

森 萌

インターン募集中!

実際に就職する前に、あるいは在学中に休学する形で、当会のスタッフになっていただき、業務を学んでいただくことができます。文書の作成、フィールドワーク、データの収集管理など、日常の業務を身に付けていただけます。また、インターンシップの過程で、適職を見つければ就職されることも可能です。

ご寄付を頂いた方々

亀崎長生 大牟田一美 野村享代 中田史子 前田直美 小林雅人 喜舎場慶子 大地昭
堀切陽子 照本善造 堀田耕平 石井紀孝 吉道さゆり 河端嶺 河端玲 関真由美 田中講二
赤本公孝 佐藤之彦 片岡友美 福元清 花本聡美 吉川信博 阿郷絹代 吉川恵子
丸若眞由美 川原達矢 太田英利 三枝勇 戸田パメラ 富岡章 末永路 増永望美 斎藤充
(株) M'sDS (株) エイ出版社 田中歩 リコー販売株式会社 神奈川支社

(順不同・敬称略) 2008年10月1日～2009年7月31日まで

事務局の主な動き

(2008年10月～2009年7月末まで)

| | |
|------------|---------------------------------|
| 10月1日 | セカンドライフ内特設店舗を大幅リニューアル |
| 10月25-26日 | 第47回爬虫両棲類学会に参加 |
| 11月16日 | 神戸ラグーンで健康診断 |
| 11月28日～30日 | 第19回日本ウミガメ会議開催 |
| 12月13日 | エコプロダクツ2008に出店 |
| 12月13日 | 神戸ラグーンで療養のウミガメ放流 |
| 12月20・21日 | ワン・ワールド・フェスティバル2008に出展 |
| 2月19日 | 国際ウミガメ学会に参加 |
| 2月21日 | 屋久島永田におけるウミガメ観察地域ルール検討会 |
| 3月2日 | ウミガメ義肢プロジェクト(悠ちゃん義肢プロジェクト)始動 |
| 3月8日 | 国頭村奥海岸における季節外れの孵化調査実施 |
| 3月11日 | Panasonic NP0サポートファンダ助成金の報告会へ参加 |
| 3月15日 | 高知県くろしお祭りに出店 |
| 3月21日 | 衛星発信器によるウミガメの追跡開始 |
| 3月21日 | 当会監修の「ウミガメが教えてくれること」放送 |
| 4月5日 | 義肢作成に先立つ型取りと運動解析用の画像撮影を実施 |
| 4月5日 | Cafe Slow Osakaにてウミガメトークを開催 |
| 4月16日 | 平成21年度日和佐ウミガメ保護対策協議会に出席 |
| 4月18日 | マリンタートル・ダイバーズ・プロジェクト講演会開催 |
| 4月19日 | アースディ東京に出店 |
| 4月25日 | 第4回表浜エクスカッションを開催 |
| 5月30日 | 「徳島県アカウミガメ上陸・産卵講習会」を開催 |
| 5月31日 | 悠ちゃんが神戸空港人工池に引っ越し |
| 6月12日 | 神戸ラグーンにアカウミガメを保護 |
| 6月20日 | 第1回 人工ヒレの装着試験を実施 |
| 6月29日 | 高知県室戸市でウミガメの授業開催 |
| 7月4日 | 西表島南岸の産卵痕 跡調査を実施 |
| 7月11・12日 | 第1回みなべSuper Sea Turtle School開校 |
| 7月17日 | 第4弾 リバイブうみがめ戦略会議を開催 |
| 7月18～20日 | 「平成21年度相良自然環境塾」を実施 |
| 7月19日 | イルカ with friendsに出店 |
| 7月25日 | 第2回 人工ヒレの装着試験を実施 |
| 7月25日 | 神戸人工池で「第1回 ウミガメ・エコツアーリズム」を開催 |

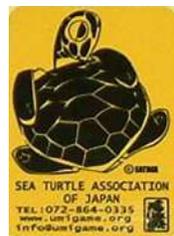
◆ STSmembers募集中!

STS(SeaTurtleSupport)membersは、ウミガメと共に生きていける自然、環境について考え、その研究・保護活動に協力する人々の集まりです。日本ウミガメ協議会では、当会をサポートくださるSTSmembersを随時募集しております。皆様のお知り合いで、自然が好きな方、海が大好きな方、ウミガメに興味をお持ちの方がおられましたら、是非、入会をお誘い下さい。

入会金：なし、年会費：個人会員3,000円、学生会員1,000円、団体会員10,000円、特別会員100,000円
会員特典： オリジナル会員証&グッズ、機関誌

◆ 携帯電話用ウミガメステッカー配布のお願い

当会では、少しでも多くのウミガメの情報を得るために、当会の連絡先がプリントされた携帯電話用ウミガメステッカーを配布しています。現在、金・銀・赤・緑・黄の5色があります。もし、海岸や海でウミガメの産卵や死体を見つけた時は、これを見て協議会にお電話下さい。ステッカーを貼ってくださる方、お友達に配っていただけの方は、必要枚数をご記入の上、80円切手を貼った返信用封筒をお送り下さい。また、このステッカーを作成するための募金も募っております。皆様のご協力をお願いします。



携帯用ステッカー

編 集 後 記

今年は淡路島で捕まり、神戸空港の人工ラグーンに保護した1頭のアカウミガメがラグーンの中で産卵しました。そのまま大阪湾に放していたらまた事故にあっていたかもしれません。それを思うと無事に産卵までできたことにホッとします。この母ガメの名前は望(のぞみ)といいます。悠と望、そして照(しょう)に会いに来てください。毎日10時から17時まで、7、8月は19時まで無料開放されています。また、自然の海でも各地から産卵情報が寄せられています。去年ほどの数ではないですが、順調に産卵が確認されています。11月27～29日に宮崎で開催する日本ウミガメ会議にて、これらの情報を取りまとめてみなさんにお知らせできるのを楽しみにしています。かた苦しなく、楽しみながらウミガメについて話のできる会議です。こちら是非お越しく下さい。

編集担当：石原 孝

マリンタートラー(日本ウミガメ協議会機関誌)

発行日 2009年8月20日
発行 日本ウミガメ協議会

〒573-0163 大阪府枚方市長尾元町5-17-18-302

電話：072-864-0335 Fax：072-864-0535

URL <http://www.umigame.org> E-mail info@umigame.org

